

里地里山の保全・活用の取組における課題と技術的方策等

分類	持続可能な利用のための伝統的技術の保存、新たな利用技術の開発
手法名	文化的景観保全と修景計画づくり
主体	東京農業大学
背景(地域の課題)	里地里山の景観保全のためには、地域の生産活動や暮らしの営みとの一体的取り組みが不可欠であるが、地元の努力だけでは十分対処できずに悩む地域が多い。そこで景観と暮らしの文化を保全し、その価値を市民の財産として後世に伝え、里地里山に暮らす人々の生活を守るという観点から、地元だけでなく様々な主体が関わることができる地域景観保全の手法と仕組みづくりが喫緊の課題となっている。
手法／方策の詳細	<p>里地里山の景観を保全するための修景計画は、色、配置、自然風景と人工物の調和という修景の構成要素にこだわるだけでなく、地域に誇りを持ってどのように人が関与するのかを念頭に置いた上で、修景への理解を深めながら進めることが大切となる。</p> <p>1) 修景計画の基本思想 ヒューマンスケール(人間の動きに適合した規模や形状となっているか)や開発の進捗速度にも配慮することが大切。また造形的美しさ、動植物の豊かさ、機能の多様性、食への連想、地域性・シンボル性、歴史性や年月を経た美などが重要な価値だと捉えることができる。計画では、周辺の山、川、地形などの景観構成要素に配慮することを基本とし、その土地の特性に応じた景観づくりが大事となる。(図)</p> <p>2) 景観整備における検討視点 ①伝統デザイン・地場材料の活用、②主役と引き立て役の関係(色への配慮、明度の高いものは主役に低いものは背景に)、③ディスプレイ(景観阻害要素)の改善、④代表的な展望箇所からの景観改善など具体的に検討する際、重要な視点となる。</p> <p>3) 景観体験の仕組み作り 交通の便の整備、ボランティアガイドの養成、体験型プログラムの作成など、製品との関わりも考慮に入れながら景観の魅力を堪能できる仕組みを作る。</p> <p>4) 修景計画の進め方 重要景観をリストアップ、図面化し、将来の管理目標を設定する。管理手法の方法、費用、主体などを定め、定期的な計画の見直しを考慮に入れて進めていく。ステップを踏んだ活動とPDCAサイクルを機能させることで「魅力づくり活動」が促進される。専門家に任せきりにせず当事者が関与するワークショップ方式がお薦めで、「急がず休まず楽しく10年計画」を心がけ息の長い継続的な活動としていくことが景観づくりでは大事である。</p> <p>5) 文化的景観の保全から見た里地里山の景観保全対策 里地里山は伝統的な暮らしと独特の生業の中から調和して生まれてきた景観であるというところから、「景観法」などの制度を利用する方策もある。</p>
手法・技術的視点	里地里山を構成する基本的な景観要素を出発点に検討することが重要。有形物の整備だけでなく、ヒューマンスケールに配慮した景観体験の仕組みや行政とも連携しながら活用できる制度利用を考えることで、景観の保全と活用の両面で可能性を広げることができる。
<p>図 景観計画の段階と検討内容</p> <p>大スケールの景観 ○ 計画対象地の位置選定 ○ 計画区域の形状検討</p> <p>中スケールの景観 ○ 計画区域内のゾーニング(土地利用) ○ 計画区域内の動線</p> <p>小スケールの景観 ○ 建物のデザイン ○ 歩道のデザイン ○ 植栽による修景</p>	
参考資料	里なび研修会in長野 東京農業大学教授 麻生恵